

## 序文

2023 年度全国調査報告書を作成しましたので、皆様にお届け致します。この報告書は、一見すると膨大な数字とその解析の結果に過ぎませんが、これは日本の移植医療の黎明期から、日々大変な思いをして移植医療に取り組んでこられた先生方とそのチーム、お一人お一人の患者さんの努力と涙の全てを物語っています。毎年、毎年、更新され、年々冊子は厚く重くなって行きますが、それだけの人々の努力が積み重なっています。加えて、ただでさえ他の診療科と比べても多忙な移植医が診療情報を報告書にまとめて登録するという大変な作業を経て報告されたものであることにも思いを馳せていただきたいと思います。

もちろん、それだけではこの膨大なデータを含む冊子が出来上がるわけではありません。報告された生の情報を解析し、わかりやすく数字や図表にまとめて頂いた日本造血細胞移植データセンターの皆様の努力の賜物でもあります。その間断なきご尽力に感謝いたします。

移植種類別報告件数の年次推移を見ますと、右肩上がりに増加してきた総移植数も最近はその伸びが鈍化し、ついに 2020 年の 6123 例をピークに、この 2 年ほどは少し減少傾向ですが、いわゆる移植可能世代人口の減少を考えると高い水準を維持していると言って良いと思います。移植細胞も多彩になってきました。おそらくはハプロ移植の拡大を反映して増加してきた血縁者間移植は 2020 年の 1314 例をピークに少し落ち着いてきた感があります。またその 8 割は末梢血幹細胞で移植が行われています。骨髄バンクからの移植は、2013 年に 1343 例を記録した後、おそらくはコロナの影響も加わり、1000 例を超えるあたりで安定しています。日本骨髄バンクは、ドナーの高齢化に伴い若いドナーの確保が急務となっており、皆で協力してドナー確保にも協力していきたいと思います。臍帯血移植は、2020 年にコロナで骨髄バンクドナーが得られにくかった影響を受けてか 1497 例を記録しましたが、その後は 1300 例を超えるあたりで安定しています。いずれにしても、もはやドナー探しに苦勞する時代は終了し、患者さんの状況に合わせて、どの細胞で移植するか選択する時代になってきています。その判断をするためにも、リアルタイムでの日本の成績が必要です。この報告書は現在の日本の移植の状況と成績を毎年更新して細かく解析してくれています。担当の先生方や患者さんの決断のための一助となればとありがたく思います。

2024 年 2 月

第 46 回日本造血・免疫細胞療法学会 総会会長  
国家公務員共済組合連合会 浜の町病院 院長  
谷口 修一